

第三十戦闘集団地下司令部壕について

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 高谷和生

1 昭和二十年の熊本

(1) 熊本の飛行場・部隊状況

太平洋戦争期の熊本県内の正規飛行場は、**陸軍7箇所**（宮地、菊池、熊本、黒石原、玉名、隈庄、八代）、**海軍2箇所**（人吉、天草）、**陸軍特攻用秘匿飛行場5箇所**（山鹿：赤穂原、植木：合志木原野、大津：古閑原、熊本北：高遊原、人吉：神殿原・陸軍人吉）の**計14箇所**である。そのなかでも本県の戦争遺跡の特徴を示す一群の秘匿飛行場は、沖縄特攻作戦とその後の本土決戦に向け、本県が置かれた地勢学的な諸相の結実である。

陸軍では、戦局の悪化に伴い1945（昭和20）年に入ると、内地飛行場の整備と防御強化が全国的に実施される。6月には特攻機を秘匿する簡易「秘匿飛行場」が、簡易道路、運動場等を利用して、主として本州西部地域に38箇所設営された。（『基地設営戦の全貌』）

一方海軍でも、本土上陸に備えて55箇所の秘匿飛行場に進出する特攻隊を編成し、訓練を継続して行った。（『海軍航空年表』『いま甦る大社基地』）。この55箇所の内訳は、所管名を「牧場」とし秘匿につとめ、横須賀・舞鶴・呉・佐世保の各鎮守府ごとに独自で設置された。九州を管内とする佐世保鎮守府では、熊本県内への秘匿基地の配置は見られなかったが、近郊では雲仙・島原・小城・戸次他の13箇所の設営を行った。

(2) 第三十戦闘集団とは

第三十戦闘飛行集団とは、来たるべき本土決戦に向け、関東で編成された三好康之少将隷下の**特攻機により編成された飛行集団**である。

部隊は「**第十六飛行団**を下館・山田邦雄中佐とし、第五十一戦隊（四式戦・下館）・池田忠雄少佐、第五十二戦隊（四式戦・成増）・高野明少佐、第五十九戦隊（四式戦・芦屋）西進少佐、第二四四戦隊（五式戦・八日市）・小林照彦少佐、第六十二戦隊（四式重・西筑紫）・小野祐三少佐」の編成となる。また、多数の中等練習機等を中心とした部隊は、「**第七飛行団**（特攻十八隊基幹・万世）・立花四郎中佐、**第二十一飛行団**（特攻三十四隊基幹・都城）・山県有光大佐」から成る。

当時の本部隊の諸動向に関しては、**当時本部隊に所属「河内山讓陸軍情報主任参謀」の回顧録、新聞記事**等がのこされている。詳細は該当記事等を参照いただきたい。以下概略のみを記す。

昭和20年7月に策定された「第六航空軍決号作戦大綱」によれば、本県一般飛行部隊は第十六飛行団（16FC）に属し「51F、52F、59F、244F、62F」の配備を行っている。特攻機は「一式戦×4、四式戦×4、偵察機×2、襲撃機×10」の部隊配備を行い、その**配当飛行場は「熊本、隈庄、菊池、黒石原、玉名、山鹿、植木、熊本北、大津」の9飛行場**とされる。

防衛庁戦史資料室内の陸軍資料「陸作命甲第二号 別紙資料 飛行場配置要図」に飛行場名（○実戦は正規飛行場、○破線は秘匿飛行場として標記）がある。「30FC」として熊本県内では「隈庄、人吉」と、鹿児島県内「知覧、萬世、上別府」、宮崎県内「都城西、都城東、木脇、唐瀬原、新田原」の南九州グループと一体化した事情が見て取れる。

これまでの調査で**玉名飛行場（第九十・九十一振武隊の二隊）、黒石原飛行場（第九十四振武隊）、陸軍人吉秘匿飛行場（第八十九振武隊）の九三式中間練習機特攻機の部隊配備が確認**されている。



写真1 芦屋飛行場（59F）での四式戦疾風の列機 1945年9月15日撮影 福林徹氏提供

(3) 熊本での第三十戦闘集団

第六航空軍の指揮下に入った第三十戦闘飛行集団司令部は、これまでの福岡から熊本に昭和20年7月5日に移駐し、**本部を花岡山の旅館「蓬莱閣（熊本市西区横手2丁目8番）」に仮住まいとし、兵舎を花岡山北側丘陵に設置**し指揮をつかさどった。

当部隊の主任参謀であった河内山讓氏によれば「**抗爆型の地下指揮施設を、国道57号の三宮神社に近いところから北に入った立田山山腹に二百数十メートルの及ぶ洞穴を掘り**」との証言が残されている。

また、地下司令部壕は、「**汽車のトンネルほどの大きな穴が三つ開いていた**」「**トンネルは人が立って十分入れる大きさの素掘り**で、両脇に机が置かれ小型の無線機や電話機が取り付けられていた。裸電球の電線が天井を走っていた」「**地下壕の前には木造の三角兵舎が二つあり、穴から出**

ては日光に当たった。部隊長以下50～60人はいたと思う」との、当時の情報将校の新忠信陸軍大尉の証言も残されている。



図1 「飛行場配置要図 陸作命甲第二号
別紙資料」 ※九州部分のみ抜粋
南アルプス市田中大輔氏提供・着色
写真2 花岡山中腹の旧旅館「蓬萊閣」跡

2 地域現状と証言、調査

(1) 立田山の現状

- 立田山は熊本市中心市街地から見て北東方向に位置する丘陵状の山で、金峰山の外輪山（熊ノ岳など）の生成と同時期に形成された山系である。住宅地の中にありながら自然が残されており、ヤエクチナシをはじめとて多くの植物が自生し、市民の憩いの場となっている。
- 熊本北バイパスから立田もえぎ台のある丘の最頂部へ向かうと、電波塔横に「立田御野立所公園」がある。明治10年の西南戦争では、官軍の砲兵陣地としても使われたこともあり、官軍砲兵陣地之址の碑とともに、昭和六年「陸軍特別大演習」の折、昭和天皇がここに野外統監されたところで、自然石に「御駐蹕（おんちゅうひつ）記念碑」と刻まれた碑がある。

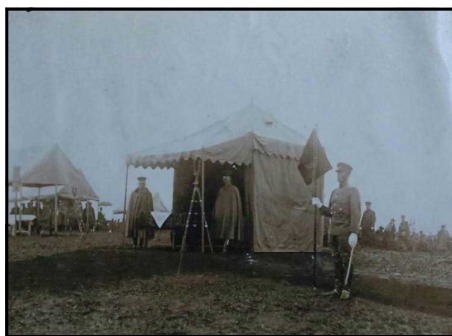


写真3・4 陸軍特別大演習で当地「龍田」を訪れた昭和天皇
穴見和喜紙提供

写真5 御野立所の「御駐蹕記念碑」現況

(2) 乃美勝彦さんによる宝積寺地区の諸調査、地域づくり活動

□乃美勝彦さん 熊本市北区龍田神内3丁目

- 龍田町陣内3丁目居住の乃美さんは、地域の歴史探訪、地域づくり活動の一環として14年前に「宝積寺地区歴史散歩」事業を行なわれた。そこでは昭和20年6月頃、当地に造営された「第三十戦闘飛行集団地下司令部壕」と、それに関わった朝鮮人労働者、司令部様子、敗戦時の混乱状況等を紹介されたという。



写真6 案内人の乃美勝彦さん

図2 乃美さん主催『宝満寺地区歴史散歩』マップ

○印が地下作戦司令部壕

(3) 証言1「父親から聞いた第三十戦闘指揮司令部」

□穴見和喜さん 熊本市北区榎の木2丁目

□戦時中、自宅（龍田町6丁目・豊肥線踏切横）は「**第三十戦闘集団部隊将校宿泊所**」になっていた。証言者は昭和23年生まれであるが、父母から「自宅は地域の名士で、多数の部隊の将校が出入りして、風呂も貸していた。主屋の藁屋根の中に敗戦間もなく、日本刀・小銃等をしばらく隠されていた」と聞いていた。また、部屋の障子の刀傷は、「玉音放送を聞いた将校が抜刀して、部屋で暴れた跡のものだ」と両親から聞いていた。

□敗戦後は、壕内部に支持木と保持板が多数残されており、物資不足のおり、地域住民が多数持ち帰り、戦後復興にあたった。現在自宅には「**保持板（全長4.03m×横19cm・六寸×厚3.3cm・材質は杉）2枚**」と「**旧陸軍円び（スコップ・全長120cm）**」が残されている。

□証言者は、戦後子ども遊び場として何度も壕にはいった。地下壕は入口が3箇所あり、東向きに開口し中央部壕は最も立派で、その間隔は15～20m程離れていた。壕の入口はほぼ円形に穿たれており、**内部断面は真四角（高さ2.5m×横幅3m程度）**となり、**支持木・坑木と保持板で固定**されて、一部の場所は三方は板張りであった。3本の壕は「御駐蹕記念碑（北西）方向」に並行して延びており、横方向にも所々で繋がりが、中央部壕では最深部までは随分と距離があったように思う。途中で上に延びる換気穴もあり、大人からは通称「三本松付近（御野立所公園の東側）」にあいていたと聞いた。



写真7 証言者人の穴見和喜さん

写真8 実家に保管されていた壕内部の全長4mの壕内保持板

写真9 壕掘削にも使用された陸軍円び（写真左側）

(4) 証言2「我が家の裏にある、特殊地下壕」

- 白木原和美さん 熊本市北区龍田陣内2丁目
- 戦後、当地に居住した際には、山腹に大きな穴が空いていた。その**入口に向い、両側の崖の間から下がり加減で入**ることができたが、今は崩れて入口がほぼ埋まっている。壕の直ぐ横には、里道が走り山頂まで続いており、里道の途中3箇所には、壕崩落の窪み痕跡が見られる。
- 1号壕は、現況で入口は崩落し断面は横幅2.7m、深3m程度**を確認することができる。



写真10 白木原和美さん宅裏の1号壕

写真11 当地より御野立所へと向う里道、陥没状況

(5) 調査1「壕造営に関わった朝鮮人労働者等」

- 朝鮮人労働者宿舎と避難壕 熊本市北区龍田陣内2丁目
- 宝積寺に隣接した民家裏には、避難用の防空壕が崖面に開口し1基を残している。この民家付近に壕掘削に関わった**朝鮮人労働者が各家庭に分宿しており、その数は200人**と言われている。壕掘削は、沖縄戦時期の4月以降での掘削開始と想定される。
- 敗戦日には「解放を喜び、帰国を願う」姿の当時証言が残されている。今後継続して聞き取り調査を実施する予定である。



写真12 朝鮮人労働者の宿舎があった宝積寺隣接家屋

写真13 同地崖面に残された避難用防空壕

(6) 調査2「現在も開口する司令部壕」

- 司令部壕 熊本市北区龍田陣内2丁目
- 2号壕は、1号壕から北東等方向に20m程離れた成松・中津家の境界付近に東向きに開口**している。
- 入口現況は大きく崩落しているが、**横幅4.1m、壕底部までは推定で6m程下がることから、当時の壕床面G Lは、両崖から一段落ち掘きったU字形状況であったと想定**される。排土先は「現市道をまたぎ東側の崖線まで延びていた」という。
- 証言では「**三角兵舎二棟**」は、1・2号壕前の民家の間で、旧畑の平場と想定できる。
- 開口部状況から、壕内部への入室は可能であるが、**現況では安全を優先し、入室は行わない**。
- 今後の調査については、**安全で精度の高い調査方法等**を検討する。



写真14 第2号壕の開口部全景

写真15 第2号壕の最深部状況

3 まとめ

- 北区龍田陳内2丁目の立田山東側山腹に、「**第三十戦闘集団地下司令部壕**」が確認できた。
- 崖面崩落や生活用土の埋土が著しいが、現地には「**2基の坑口・開口部**」が確認できた。
- 地域には本司令部及び本壕に関する当時証言や戦時資料（陸軍円び・保持板）が残されており、**今後は壕内部の安全な測量調査等をはじめ、聞き取り調査等が必要**である。

[資 料]

- ①河内山 譲「立田山山腹に長い洞窟 熊本にあった特攻集団 上」昭和57（1982）年8月5日 熊日新聞朝刊
- ②河内山 譲「遂に作戦開始日決まる 熊本にあった特攻集団 中」昭和57（1982）年8月6日か 熊日新聞朝刊
- ③河内山 譲「終戦、一日の差で作戦不発」「熊本にあった特攻集団 下」昭和57（1982）年8月7日か 熊日新聞朝刊
- ④河内山 譲「あった！地下司令室 終戦直前の第30戦闘飛行集団 竹ヤブの囲まれ」昭和57（1982）年8月5日 熊日新聞夕刊
- ⑤河内山 譲「終戦時の熊本」『江原ものがたり 一戦争と平和』平和祈念モニュメント建立江原会有志の会 1998年



連絡先

□くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷 和生
個人携帯 090-1513-5528
Eメール takayanagi912@yahoo.co.jp
HP URL <http://www.kumamoto-senseki.net/>



くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク